

## 審査概要

平成三十年度の文部科学大臣賞の選考は、平成二十九年四月一日から同三十年三月三十一日に至る一年間に刊行された連歌・俳諧・俳句に関わる著作の中から、まず、候補たり得る著作八点を厳選し、選考委員七名によるそれらの綿密な査読、その結果を持ち寄つての選考委員会における慎重審議によつて行われた。その結果、西山宗因全集編集委員会編『西山宗因全集』全六巻（最終巻・平成二十九年四月、八木書店刊）を最優秀著作として推薦することに決定した。

本全集は第一巻「連歌篇一」、第二巻「連歌篇二」、第三巻「俳諧篇」、第四巻「紀行・評点・書簡篇」、第五巻「伝記・研究篇」、第六巻「解題・索引篇」からなる。西山宗因は、大阪天満宮連歌宗匠であり、談林俳諧の総帥とされたという立場からも、近世初期の連歌から俳諧へという文学の流れのただ中に位置づけられる者で、連歌、俳諧という文芸とはいかなるものであるかを見極めるために、もつとも重要な人物である。『去来抄』に書き留められた「上に宗因なくんば、我々が俳諧、今以て貞徳が涎をねぶるべし。宗因はこの道の中興開山なり」との芭蕉の言葉からも分かるように、蕉風俳諧を準備した者でもあった。近世初期の俳諧動向が、文学とは何をどう表現するかをめぐつての文学運動であつたとすれば、その中心にいた人物が宗因であり、宗因の研究なくしては近世初期のみならず文学とは何かを明らかにすることができないとも言えよう。

それにもかかわらず、これまで、宗因のなした文芸活動の総体をひとつに集積した書がなかつた。大きく言えば、日本文学史研究上の極めて大きな欠陥であつたと言えよう。集積したことの意味は重要で、例えば、宗因は俳諧師として文学史に記述されることが多く、その文芸の基盤である連歌が無視されがちであつたが、本全集において連歌に俳諧の倍である二巻が与えられていることによつて、一目瞭然に連歌活動の重要性が認識されることとなる。このような単純に見えることによつても、本全集により宗因の文芸上の立場が大きく書き換えられることとなろう。

このように、本全集の価値は連歌および俳諧作品の網羅ということにあることは当然であるが、第四巻所収の合点資料を集めた「評点」、第五巻の「肖像」「文台」等々の資料、宗因をめぐるさまざまな「記録」等も重要で、これらによつて、宗因の人物像も見えてくる。「俳論・雑抄」もこのような全集としては画期的で、周辺の人々が宗因をどう見ていたのか、これによつて簡便に把握できる。この第四巻によつて宗因の立体的な把握が進展する可能性が開けてきた。巻末の「西山宗因年譜」はそのひとつの現れで、上記の資料を

縦横に用いてのこの年譜は現段階での宗因研究の頂点を示すものとなっている。

第六巻には新たに発見された作品などを収めると同時に、「現存真跡一覧」「資料解題」「初句索引」を収める。新発見資料はこれからも多く出現する可能性があつて、この点からは、増補版が必要となるかと思われるが、そのためにも、「現存真跡一覧」は重要で、これは今後の宗因関連資料の真贋判断基準となるものである。「資料解題」も新見に満ちており、宗因研究資料の目録に該当するものとして、今後、宗因研究を目指す者は、この「資料解題」を手引きとすることから始める必要があるとしてよいであろう。

本全集は第一巻が二〇〇四年九月に刊行された。その時から最終巻まで、十二年半かかっている。監修は尾形仵・島津忠夫と記載されている。両氏ともに既に鬼籍に入られた。完成を念願していたであろうが、新資料の出現などもあつて、なかなか完結しなかつた。時間のかかつたことは、出来る限りの完璧を目指した結果として評価すべきこととも言えよう。このような監修者の意志を引き継いで、次代を背負う研究者が本全集を完成させたことは研究の継続を目の当たりに見せてくれるものとして、感慨深いものがある。

本全集は大部なものであり、この全集の価値を網羅的に紹介することはむずかしい。このことは、本全集が研究者の立場によって、尽きることのない基礎資料の宝庫となつていることの裏返しとも言える。本書によって、新たな宗因、連歌・俳諧研究が進展することを願つてやまない。

以上、本書を今年度の文部科学大臣賞にもつともふさわしい著作として推薦するゆえんである。

文部科学大臣賞選考委員会

委員長 廣木一人